追手門学院大学心理学論集
2017，第 25 号，*pp.1-11*

原　著

思春期の家族構造が青年期の情動知性に与える影響

後　藤　あかり
（神戸松蔭女子学院大学大学院文学研究科心理学専攻）

The influence of family structure in puberty on adolescent emotional intelligence.

Akari Goto
（*Kobe Shoin Graduate School of Letters, Psychology Program*）

キーワード：青年期の情動知性，家族構造，思春期
Key Words : adolescent emotional intelligence, family structure, puberty

問　　題

情動知性について

心理学の歴史の中で、人間の情動に焦点が当てられるようになったのは比較的最近のことである。かつて情動は非合理性の象徴とされており、理性と対立的な構図で捉えられてきた。その情動と理性の両方にまたがり、知能指数（intelligence quotient：IQ）よりも人生の成功度に関わっていると考えられ、近年研究や応用が数多く展開され注目されているのが情動知性（emotional intelligence：EI）である（箱田・遠藤，2015）。情動知性とは自分自身や他者の情動を認識したり、表出したり、また理解したり、コントロールしたりする、主に対人コミュニケーション場面で働く能力のことである（小松・箱田，2011）。情動知性は、Salovey & Mayer（1990）により自己と他者の感情及び情動を認識して区別し、思考や行動に活かす能力として定義され、提唱された。

これまでの情動知性に関する研究には、情動知性と社会的な成功や性格特性との関連を検討したものや、情動知性の発達に関するものが報告されてきた。豊田・照田（2013）は、情動知能が高いほど、ストレスへの対処行動が適切になされ、ストレス反応や抑うつ・不安及び無気力傾向が低減すると報告している。性格特性との関連について大野木（2004，2005）は、情動知性は 5 因子性格検査（FFPQ）と短縮版ネオ人格目録改訂版（NEO-FFI）の誠実性、外向性、協調性と高い相関を持つことを報告している。また豊田・森田・金敷・清水（2005）は、情動知性と自尊感情に正の相関が認められたことを報告している。以上の研究から、情動知性は我々の日常生活をより良くし、精神的健康を高める働きがあることが明らかになっていると言える。

情動知性の発達に関する研究では、相手の気持ちを感じとれた経験である共感経験の多さと、相手の気持ちを感じとれなかった経験である不全経験の少なさが、情動知能を高めることが明らかになっている（豊田，2008b）。また野崎（2012）は、ストレス経験からの成長という環境要因が情動知能の高さに影響を与えるとし、豊田・照田（2013）は情動に対処した経験の多さが情動知能の高さに影響すると述べている。しかし、情動知性の発達に関する研究はまだ少ないのが現状であり、情動知性の高まりを助長する要因を検討することは意義があることだと考えられる。また、情動知性の性差についても直接的な要因を検討する研究は少なく、性差が存在する理由についても現在のところ明らかにされてはいない。

ところで、情動知能の最も低い状態としてアレキシサイミアというパーソナリティがある。アレキシサイミアとは、Sifneosが名づけた、心身症患者に見られる感情への気づきや描写の乏しさを特徴とす

る感情制御の障害である（Sifneos，1973）。このアレキシサイミアと情動知性には有意な負の相関が認められることが明らかにされている（酒井，2001）。アレキシサイミアと家族構造について馬場・佐藤（2003）は、コミュニケーションに関連する家族機能因子とアレキシサイミアは関連性が高いとしている。また馬場・興津・中西（2014）は、アレキシサイミアの家族では葛藤場面において両親と子どもの3者間の親密距離は近く、両親間の距離が他の2群より有意に短いことを明らかにしている。それに加えて母親の影響力が最も高く、子どもは両親のいずれよりも影響力が低いことも明らかにしている。これらの研究結果を踏まえると、家族全体の結びつきや両親の結びつきが強い家族における子どもの情動知性は低くなることが推察され、また家族内での母親の勢力の強さや子どもの勢力の低さも情動知性の低下に影響を与えると考えられる。

家族構造について

家族の構造、機能については数多くの理論が存在している。また、それらを測定する要因も様々あり、尺度も数多く存在している。そんな中、家族に関する研究を行う上でどのような因子を想定することが最もふさわしいのかを検討し、家族の構造を理解するための新しい尺度を作成したのが野口・狐塚・宇佐美・若島（2009）である。複数の因子から家族構造を測定するために作成された尺度ICHIGEKI（Inventory for Character of Intra-Inter Generation in Kinship）は「結びつき」「勢力」「利害的関係」「開放性」の4因子構造と、さらに「葛藤」「社会的興味」「統制力」「ルール」の4因子を加えた8因子構造の2パターンがある。またICHIGEKIは、家族構造を家族全体の測定のみではなく、家族内の父―母間、父―子間、母―子間といった家族内サブシステムの測定から検討していく。つまりMinuchin（1974 山根訳 1984）の構造的家族療法で重視される、家族の中に存在する両親関係や親子関係などのサブシステムに焦点を当てており、より高次な家族構造の研究を行うための道具だとされている。

近年、家族機能が子どもに影響を及ぼす際には両親の家族機能の評価より子ども自身の評価がより重要であることが明らかになり（若原，2003）、子どもの家族機能認知に関する研究は盛んに行われている。井村・石田（2012）は、青年の家族イメージと発言抑制傾向との関連性を示唆し、両親の勢力が強いという家族イメージを持つ子どもは相手から拒否・否定されないように発言を控える傾向が強いことを明らかにしている。

八木（2010）は、我々は家族成員との交流を通して他者との社会的な相互作用を習得すると述べている。また、先述したように共感経験の多さと不全経験の少なさが情動知性の発達に関わることも明らかになっており（豊田，2008）、共感経験や不全経験をする最も身近な対象は、我々が生まれながらにして所属する社会集団である家族だと考えられる。よって本研究では、情動知性の発達の要因として過去の家族構造に注目することとする。過去の家族構造としては、野口他（2009）のICHIGEKIの4因子構造の尺度を用いて、思春期（13歳～18歳）の頃の父―母、父―自分、母―自分という三者関係の「結びつき」「勢力」「利害的関係」「開放性」について取り上げることにする。情動知性は、野崎（2012）が定義した、自己領域としての「自己の情動の評価と認識」「自己の情動の調整」、他者領域としての「他者の情動の評価と認識」「他者の情動の調整」をその構成要素として採用した。そして、情動知性と家族構造の関連を検討するにあたり、以下のような仮説を設定した。

まず「結びつき」についてMinuchin（1974 山根訳 1984）は、家族の「結びつき」が強すぎるような絡み合った家族構造や、「結びつき」が弱すぎるような乖離した家族構造は子どもの病理や家族問題を引き起こしやすいと述べている。よって、中程度の家族の「結びつき」が情動知性を高めると考えられる。

「勢力」について井村・石田（2012）の研究から、両親の勢力が強く、子どもの勢力が弱い家族構造における子どもは積極的に対人コミュニケーションを行わず、家族成員やそれ以外の他者との交流が少ないことが考えられる。よって、父母から自分への勢力の強さと自分から父母への勢力の弱さは情動知性を低下させると考えられる。

「利害的関係」が強いということは、普段はあまり相手との関わりを多く持たないが、自分や相手にとって利害のあること、重要なことが関連しているときには相手との関わりが強くなるということを示している。これは普段の家族成員間の対人コミュニケーションの低さを示唆すると考えられ、よって家族成員間の利害的関係の強さは情動知性を低下させると考えられる。

他者を家庭に招き入れたり自らが外のシステムに参加していくという「開放性」は、対人関係の積極性を意味し、開放性が強ければ対人コミュニケー

ションの機会が増え、その中で情動に対処する機会や共感経験が多くなることが考えられる。また大野木（2004，2005）が、5因子性格検査（FFPQ）と短縮版ネオ人格目録改訂版（NEO-FFI）の外向性と情動知性の正の相関関係を明らかにしていることからも、家族成員の開放性の高さは情動知性を高めると考えられる。

目　　的

本研究では先述した仮説を検証するために、思春期（13歳～18歳）の頃の家族構造が、青年期の情動知性に与える影響を明らかにすることを目的とした。

方　　法

調査時期・対象者・調査方法

調査は2015年7月に実施した。近畿圏の私立大学在学中の学生に対して調査を行い、回答に不備のなかった239名（男性88名、女性151名）を最終的な分析対象とした。平均年齢は20.27歳（SD＝2.89）であった。授業後に質問紙を配布し、時間がある人はその場で記入してもらい回収した。時間がない人は質問紙回収箱への投函によって後日回収した。

質問紙の構成

情動知性　Wong & Law（2002）のWong & Law Emotional Intelligence Scale（WLEIS）を、豊田・桜井（2007）が中学生用に日本語訳した中学生用J-WLEISの項目を、野崎（2012）が一部改変したものを用いた。中学生用の尺度となっているが、これは日本語訳する際に、表現を中学生にもわかる平易な表現を用いただけであり、大学生を対象とした本研究で用いても問題ないと判断した。項目数は16項目で、下位尺度は「他者の情動の評価と認識」「他者の情動の調整」「自己の情動の調整」「自己の情動の評価と認識」であった。現在の自分にあてはまると思われる箇所いずれか一つに○印をつけてくださいと教示し、「非常にあてはまる（5点）」から「まったくあてはまらない（1点）」の5段階で評定を求めた。

家族形態についての設問　中学・高校生時代の両親との同居・別居状態について調査した。質問項目は「あなたは中学～高校生だった頃に誰と同居していましたか？」とした。選択肢を1から4まで設定し、1．両親と同居していた、2．祖父母、両親と同居していた、3．父親か母親のどちらかのみと同居していた、4．その他（寮生活で一人暮らしなど）から回答を求めた。

家族構造　野口他（2009）により作成された家族構造を測定する尺度‐ICHIGEKI‐の4因子構造のものを用いた。家族構造として父―母、父―子、母―子という三者関係を基本として「結びつき（お互いの仲の良さや親密さ、連帯感）」「勢力（決定力や影響力、発言力）」「利害的関係（お互いが自分に何か得られるものや興味がある時だけ関わり合う、または家族に何か重要なことがある時だけお互いが興味関心を示す）」「開放性（家庭に他の人が遊びに来たり夕食を共にする、家族以外の人を家に招くことを好む、といった家族以外の人との関わりなど）」の程度が「1：非常に弱い」～「10：非常に強い」のうちどれにあてはまっていたかを数字で記入させ測定した。父・母・子という3つの二者間における家族構造を測定するため、各因子の特徴に従い「結びつき」については二者間の程度（例：父―母間の結びつきの程度）、「利害的関係」「勢力」については二者がそれぞれ相手に対して持っている程度（例：父から母に対する利害的関係の程度と、母から父に対する利害的関係の程度）、「開放性」については家族の各個人が持っている程度（例：父が持っている開放性の程度、母が持っている開放性の程度）をそれぞれ評定させた。なお、今回調査した項目は思春期（13～18歳）の頃の家族構造について質問しているため、全項目の教示文を過去形に修正した。家族形態の設問で、3．父親か母親のどちらかのみと同居していた、と回答した場合は、代わりとなる特定の養育者がいればその人物をあてはめて回答するよう教示し、あてはまる人物がいなければその人物に関わる回答箇所を空欄にするよう初めに教示した。

結　　果

情動知性尺度の因子構造の検討

情動知性尺度の16項目に対して、野崎（2012）の先行研究と同様に因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。その結果、先行研究と一致する4因子が抽出された。しかし「EI15 自分をやる気にさせることが得意だ」の項目の共通性が.15と低く、また、第4因子である「他者の情動の調整」に高い因子負荷量を持ち、他の項目と比較した際の解釈可能性の観点からこの項目を除外した。残りの15項目に対して、再度4因子解を仮定した因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。最終的に4因子

15項目が抽出された。

先行研究にならい、第 1 因子は「自己の情動の調整」、第 2 因子は「自己の情動の評価と認識」、第 3 因子は「他者の情動の評価と認識」、第 4 因子は「他者の情動の調整」とした。また、内的整合性の検討のため、クロンバックの α 係数を求めたところ、自己の情動の調整で.867、自己の情動の評価と認識で.794、他者の情動の評価と認識で.782、他者の情動の調整で.760であり、十分な内的整合性が認められた。因子分析の結果と各因子の α 係数を表 1 に示した。各因子の平均値とSDは、「自己の情動の調整」が平均値2.93点（SD=1.03点）、「自己の情動の評価と認識」が平均値3.67点（SD=.78点）、「他者の情動の評価と認識」が平均値3.47点（SD=.73点）、「他者の情動の調整」が平均値2.85点（SD=.76点）であった。

表1　情動知性尺度の因子分析結果

項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	共通性
Ⅰ.自己の情動の調整（α＝.87）					
9. 腹が立って，気持ちが高ぶっていても，すぐに落ち着きを取り戻すことができる	**.87**	-.07	-.04	-.02	.73
10. 私は自分自身の気持ちをコントロールすることが上手だ	**.86**	.00	-.01	-.05	.69
11. 私は，難しい問題が起こった時でも，自分の気持ちを抑えて，きちんと解決できる	**.75**	.11	.04	.05	.69
Ⅱ.自己の情動の評価と認識（α＝.79）					
14. 私は，何か起こった時には，その時の自分の気持ちがよく分かっている	-.01	**.83**	.08	-.08	.69
13. 私は，自分の気分が良い時や，嫌だなと思う時がいつも分かっている	-.11	**.79**	-.02	-.08	.53
12. 私は，今すごくうれしいとかつらいとか，自分自身のいろいろな気持ちをよくわかっている	.15	**.60**	-.11	.10	.47
16. 私は何か起こった時に，自分がどうしてそんな気持ちになったのか，たいてい理由がわかる	.07	**.58**	.04	.04	.40
Ⅲ.他者の情動の評価と認識（α＝.78）					
4. 友達の気持ちや感情を敏感に感じ取ることができる	.01	-.10	**.95**	-.06	.80
2. 友達の行動を見ればその友達が今どんな気持ちなのかがいつもわかる	.07	.00	**.75**	-.06	.54
1. 何か起こった時，周りの友達がどうしてそんな気持ちになっているのかが分かる	-.05	.08	**.52**	.13	.38
3. 周りの友達が皆，今どんな気持ちなのかいつも観察して気にかけている	-.12	.09	**.45**	.16	.32
Ⅳ.他者の情動の調整（α＝.76）					
5. 人をやる気にさせることが得意だ	-.07	-.04	-.04	**.78**	.56
7. 他の人が不安に感じているときに，その不安を取り除くことが上手だ	.05	-.14	.03	**.70**	.51
8. 他の人を喜ばせることが得意だ	-.07	.10	.02	**.68**	.50
6. 友達が怒っていてもうまく落ち着かせることができる	.18	.05	.12	**.44**	.35
寄与率（%）	25.74	14.87	7.71	6.08	

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ	—	.47	.21	.19
Ⅱ		—	.26	.19
Ⅲ			—	.54
Ⅳ				—

家族構造と性差による情動知性の比較

ICHIGEKIの下位尺度得点の平均値とSDを表 2 に示した。家族構造と性差による情動知性の比較を行うために、ICHIGEKIの下位尺度得点をそれぞれ平均値 ± 1SDを基準に 3 群（上位群、中位群、下位群）に分け、この 3 群と性別とを独立変数、情動知性を従属変数とする 2 要因の参加者間分散分析を行った。情動知性下位因子ごとの分散分析結果を表 3 ～ 6 に示した。分散分析結果は家族構造の群要因と性別の主効果、及び交互作用が有意だったもののみ掲載した。

表2　ICHIGEKI下位尺度の平均値と標準偏差

		M	*SD*			*M*	*SD*
結びつき				利害的関係			
	父と母	6.17	2.68		父から母	5.13	2.79
	母と自分	7.33	2.17		母から父	4.93	2.85
	父と自分	5.03	2.64		母から自分	4.55	2.86
勢力					自分から母	4.74	2.69
	父から母	6.11	2.50		自分から父	4.99	2.77
	母から父	5.86	2.36		父から自分	4.69	2.88
	母から自分	6.74	2.18	開放性			
	自分から母	5.25	2.11		父	4.55	2.98
	自分から父	4.26	2.29		母	5.12	3.02
	父から自分	6.03	2.65		自分	4.94	2.85

表3　家族構造の違いによる自己の情動の調整得点の比較（分散分析結果）

	男性	女性	男性	女性	男性	女性	群要因 F（df=2,233）	性別要因 F（df=1,233）	交互作用	群要因の多重比較
結びつき			母と自分							
	上位群（n=45）		中位群(n=150)		下位群(n=44)					
	3.37	3.11	3.07	2.77	3.16	2.59	1.45	4.95 *	0.32	
	(0.94)	(1.02)	(1.12)	(0.90)	(1.18)	(1.08)				
			父と自分							
	上位群（n=53）		中位群(n=139)		下位群(n=47)					
	3.33	3.13	3.03	2.76	3.17	2.63	2.08	4.72 *	0.35	
	(1.23)	(1.02)	(1.10)	(0.91)	(1.02)	(1.02)				
勢力			父から母							
	上位群（n=47）		中位群(n=151)		下位群(n=41)					
	3.29	2.85	3.10	2.86	3.06	2.67	0.35	4.32 *	0.18	
	(1.32)	(1.01)	(1.07)	(0.97)	(1.16)	(0.93)				
			母から父							
	上位群（n=32）		中位群(n=168)		下位群(n=39)					
	3.43	2.52	3.08	2.90	3.00	2.71	0.21	6.53 *	1.66	
	(1.36)	(0.87)	(1.07)	(1.00)	(1.04)	(0.89)				
			母から自分							
	上位群（n=56）		中位群(n=154)		下位群(n=29)					
	3.36	2.87	3.08	2.82	3.08	2.69	0.55	4.71 *	0.21	
	(1.10)	(1.07)	(1.14)	(0.91)	(1.03)	(1.04)				
			自分から母							
	上位群（n=37）		中位群(n=157)		下位群(n=45)					
	3.73	2.89	3.08	2.93	2.94	2.32	4.22 *	10.03 **	2.06	上・中位群＞下位群
	(1.42)	(0.88)	(1.05)	(0.97)	(1.07)	(0.90)				
			自分から父							
	上位群（n=40）		中位群(n=164)		下位群(n=35)					
	3.45	2.69	3.08	2.88	3.07	2.70	0.27	6.31 *	1.02	
	(1.44)	(0.98)	(1.04)	(0.94)	(1.17)	(1.08)				
利害的関係			父から母							
	上位群（n=53）		中位群(n=136)		下位群(n=50)					
	3.46	2.69	3.07	2.80	2.94	2.96	0.31	4.16 *	1.57	
	(1.23)	(1.07)	(1.05)	(0.89)	(1.24)	(1.01)				
			母から自分							
	上位群（n=43）		中位群(n=151)		下位群(n=45)					
	3.40	2.61	3.06	2.87	3.13	2.85	0.02	5.38 *	1.34	
	(1.14)	(0.95)	(1.09)	(0.94)	(1.25)	(1.06)				
			自分から母							
	上位群（n=48）		中位群(n=127)		下位群(n=64)					
	3.57	2.80	2.98	2.78	3.22	2.88	1.58	7.37 **	1.29	
	(1.12)	(1.07)	(1.08)	(0.90)	(1.13)	(1.00)				
開放性			父							
	上位群（n=46）		中位群(n=142)		下位群(n=51)					
	3.41	3.34	3.04	2.69	3.12	2.69	4.35 *	3.18	0.41	上位群＞中・下位群
	(1.12)	(0.95)	(1.03)	(0.92)	(1.40)	(0.98)				
			母							
	上位群（n=41）		中位群(n=141)		下位群(n=57)					
	3.40	2.85	2.91	2.83	3.59	2.78	2.04	8.79 **	2.35	
	(1.05)	(1.10)	(1.09)	(0.92)	(1.11)	(1.01)				
			自分							
	上位群（n=53）		中位群(n=128)		下位群(n=58)					
	3.40	2.78	2.99	2.91	3.22	2.67	0.39	7.70 **	1.71	
	(1.16)	(1.03)	(1.10)	(0.93)	(1.07)	(0.98)				

* $p < .05$, ** $p < .01$
上段：平均値，（下段：SD）

表4 家族構造の違いによる自己の情動の評価と認識得点の比較（分散分析結果）

	男性	女性	男性	女性	男性	女性	群要因 F（df=2,233）	性別要因 F（df=1,233）	交互作用	群要因の多重比較
結びつき			母と自分							
	上位群（n=45）		中位群(n=150)		下位群(n=44)					
	3.83	3.83	3.76	3.71	3.34	3.30	5.65 **	0.06	0.02	上・中位群＞下位群
	(0.49)	(0.72)	(0.77)	(0.71)	(0.94)	(0.97)				
勢力			母から父							
	上位群（n=32）		中位群(n=168)		下位群(n=39)					
	3.91	3.38	3.57	3.70	4.02	3.73	1.30	2.83	3.03 *	
	(1.01)	(0.92)	(0.71)	(0.75)	(0.90)	(0.75)				
			自分から母							
	上位群（n=37）		中位群(n=157)		下位群(n=45)					
	3.88	3.69	3.73	3.75	3.42	3.36	3.73 *	0.17	0.23	中位群＞下位群
	(1.13)	(0.60)	(0.75)	(0.75)	(0.94)	(0.94)				
利害的関係			母から父							
	上位群（n=48）		中位群(n=130)		下位群(n=61)					
	3.67	3.66	3.56	3.64	4.27	3.72	3.87 *	1.70	2.51	
	(0.64)	(0.92)	(0.83)	(0.73)	(0.62)	(0.74)				
			母から自分							
	上位群（n=43）		中位群(n=151)		下位群(n=45)					
	3.75	3.66	3.56	3.63	4.53	3.78	6.00 **	3.61	3.23 *	下位群＞中位群
	(0.73)	(0.88)	(0.78)	(0.70)	(0.45)	(0.86)				

* p < .05,** p < .01
上段：平均値，（下段：SD）

表5 家族構造の違いによる他者の情動の評価と認識得点の比較（分散分析結果）

	男性	女性	男性	女性	男性	女性	群要因 F（df=2,233）	性別要因 F（df=1,233）	交互作用	群要因の多重比較
結びつき			父と母							
	上位群（n=44）		中位群(n=150)		下位群(n=45)					
	3.18	3.50	3.36	3.49	4.08	3.54	5.11 **	0.05	4.15 *	
	(0.88)	(0.63)	(0.64)	(0.64)	(0.88)	(0.63)				
			父と自分							
	上位群（n=53）		中位群(n=139)		下位群(n=47)					
	3.05	3.26	3.37	3.57	4.11	3.60	11.54 ***	0.11	4.52 *	中・下位群＞上位群
	(0.83)	(0.64)	(0.82)	(0.63)	(0.75)	(0.59)				
勢力			母から父							
	上位群（n=32）		中位群(n=168)		下位群(n=39)					
	3.46	3.31	3.33	3.52	3.98	3.58	3.46 *	0.90	2.63	
	(0.91)	(0.63)	(0.85)	(0.63)	(0.77)	(0.66)				
利害的関係			自分から父							
	上位群（n=50）		中位群(n=133)		下位群(n=56)					
	3.61	3.52	3.23	3.52	4.02	3.47	4.51 *	1.09	5.46 **	
	(0.81)	(0.62)	(0.86)	(0.65)	(0.73)	(0.63)				

* p < .05,** p < .01,***p < .001
上段：平均値，（下段：SD）

表6　家族構造の違いによる他者の情動の調整得点の比較（分散分析結果）

	男性	女性	男性	女性	男性	女性	群要因 F（df=2,233）	性別要因 F（df=1,233）	交互作用	群要因の多重比較
結びつき			母と自分							
	上位群（n=45）		中位群(n=150)		下位群(n=44)					
	3.28	3.09	2.86	2.79	2.96	2.48	3.89 *	3.87 *	1.28	上位群＞中・下位群
	(0.68)	(0.65)	(0.77)	(0.72)	(0.90)	(0.77)				
			父と自分							
	上位群（n=53）		中位群(n=139)		下位群(n=47)					
	2.83	2.81	2.87	2.89	3.25	2.58	0.20	3.76	3.52 *	
	(0.66)	(0.66)	(0.87)	(0.70)	(0.61)	(0.88)				
勢力			父から母							
	上位群（n=47）		中位群(n=151)		下位群(n=41)					
	3.32	2.97	2.84	2.76	2.93	2.77	3.29 *	2.45	0.53	
	(0.55)	(0.70)	(0.86)	(0.75)	(0.48)	(0.74)				
			父から自分							
	上位群（n=46）		中位群(n=152)		下位群(n=41)					
	3.24	2.91	2.79	2.76	3.13	2.88	3.34 *	2.85	0.79	
	(0.71)	(0.62)	(0.83)	(0.70)	(0.61)	(0.96)				
利害的関係			自分から父							
	上位群（n=50）		中位群(n=133)		下位群(n=56)					
	2.91	2.90	2.82	2.80	3.42	2.76	2.21	3.92 *	2.99	
	(0.74)	(0.73)	(0.82)	(0.71)	(0.80)	(0.80)				
			父から自分							
	上位群（n=45）		中位群(n=157)		下位群(n=37)					
	3.05	2.74	2.83	2.84	3.30	2.78	0.95	4.57 *	1.89	
	(0.84)	(0.49)	(0.78)	(0.74)	(0.73)	(0.95)				

* p < .05,** p < .01
上段：平均値，（下段：SD）

分散分析の結果、自己の情動の調整について母と自分、父と自分の結びつき、父から母、母から父、母から自分、自分から母、自分から父への勢力、父から母、母から自分、自分から母への利害的関係、母、自分の開放性において性別の要因に主効果が認められ、女性より男性の方が有意に得点が高いことが明らかとなった。加えて自分から母への勢力、父の開放性において家族構造要因の主効果が認められ、Tukey法による多重比較の結果、自分から母への勢力上、中位群は下位群より、また、父の開放性上位群は中、下位群より得点が有意に高いことが明らかとなった。

自己の情動の評価と認識については母と自分の結びつき、自分から母への勢力、母から父への利害的関係において家族構造要因の主効果が認められた。多重比較の結果、母と自分の結びつき上、中位群は下位群より、また、自分から母への勢力中位群は下位群より有意に得点が高いことが明らかとなった。母から父への利害的関係の多重比較の結果は有意ではなかった。加えて、性別と母から父への勢力、性別と母から自分への利害的関係において有意な交互作用が認められた。単純主効果の検定を行ったところ、母から父への勢力においては単純主効果は認められなかった。母から自分への利害的関係においては下位群において性別の単純主効果が有意であり（F(1,233)=6.35,p<.05）、下位群では男性が女性より有意に得点が高いことが明らかとなった。また、男性群において家族構造要因の単純主効果が有意であり（F(2,233)=5.81,p<.01）、Tukey法による多重比較の結果、男性では母から自分への利害的関係下位群が中位群より有意に得点が高いことが明らかとなった。

他者の情動の評価と認識については、母から父への勢力において家族構造要因の主効果が認められたが、多重比較の結果は有意ではなかった。また、性別と父と母の結びつき、性別と父と自分の結びつき、性別と自分から父への利害的関係において有意な交互作用が認められた。単純主効果の検定の結果、父と母の結びつき下位群における性別の単純主効果が有意であり（F(1,233)=5.23,p<.05）、父と母の結びつき下位群の男性は女性より得点が有意に高いことが明らかとなった。また、男性群における家族構造要因の単純主効果が有意であり（F(2,233)=6,69,p<.01）、Tukey法による多重比較の結果、男性では父と母の結びつき下位群が上、中位群より有意に得点が高い

ことが明らかとなった。自分と父の結びつきにおいては、下位群における性別の単純主効果が有意であり（F(1,233)=5.73,p<.05)、父と自分の結びつき下位群の男性は女性より得点が高く、また、男性群における家族構造要因の単純主効果が有意であり（F(2,233)=10.83,p<.001)、Tukey法による多重比較の結果、男性では父と自分の結びつき下位群が上、中位群より有意に得点が高いことが明らかとなった。自分から父への利害的関係においては中位群と下位群において性別の単純主効果が有意であり（順にF(1,233)=5.14,F(1,233)=5.90,ともにp<.05)、自分から父への利害的関係下位群では男性が女性より、中位群では女性が男性より有意に得点が高いことが明らかとなった。加えて、男性群における家族構造要因の単純主効果が有意であり（F(2,233)=7.16,p<.01)、Tukey法による多重比較の結果、男性では自分から父への利害的関係下位群が中位群より有意に得点が高いことが明らかとなった。

他者の情動の調整については、母と自分の結びつき、自分から父、父から自分への利害的関係において性別の主効果が認められ、女性より男性の方が有意に得点が高いことが明らかとなった。加えて、母と自分の結びつき、父から母、父から自分への勢力において家族構造要因の主効果が認められ、多重比較の結果、母と自分の結びつき上位群は中、下位群より得点が有意に高いことが明らかとなった。父から母、父から自分への勢力の多重比較は有意ではなかった。さらに、性別と父と自分の結びつきにおいて有意な交互作用が認められた。単純主効果の検定の結果、父と自分の結びつき下位群における性別の単純主効果が有意であり（F(1,233)=8.36,p<.01)、父と自分の結びつき下位群の男性は女性より得点が有意に高いことが明らかとなった。

考　　察

「結びつき」、「勢力」と情動知性の関連

分析の結果から、父親と他の家族成員の結びつきが弱い場合、あるいは父親の勢力が他の家族成員より強い場合に他者の情動の調整、他者の情動の評価と認識といった他者領域の情動知性が高まることが明らかとなった。また、母と自分の結びつきの強さは自己の情動の評価と認識、他者の情動の調整といった情動知性を高めることが明らかとなった。また、自分の勢力が母より強いと自己の情動の調整、自己の情動の評価と認識といった自己領域の情動知性が高まることが示された。

つまり、父親の勢力が強く、父親が母親と子どもの両者と結びつきが弱いが、母親と子どもは強く結びつき、子どもの母親への勢力が強いと子どもの情動知性が高まることが示唆された。結びつきに関しては、父親よりも母親との結びつきの強さが、勢力に関しては、母親よりも父親の勢力の強さが子どもの情動知性の発達に影響を与えることが明らかとなった。豊田（2013）は、母親と強く結びつき、母親に対して基本的信頼感を獲得すると、母親以外の人間に対しても同じように信頼感を抱きやすいとしている。つまり、母親との結びつきの強さは他者への信頼感の高さにつながり、他者との関わりが多くなることが考えられる。情動知性の高さに影響を与える共感経験は他者との関わりの中で経験するものであり、他者との関わりの多さは共感経験の多さに結びつくことが考えられる。このようにして、母親と自分の結びつきの強さは自己の情動の評価と認識、他者の情動の調整といった情動知性の高さに影響を与えることが考えられる。

また今回、父親と家族成員との結びつきの弱さが他者の情動の調整、他者の情動の評価と認識といった他者領域の情動知性を高めるという結果が得られ、他者領域の情動知性には父親と家族成員との関係が影響を与えることが明らかとなった。柏木（1993）は、思春期から青年期にかけて父親と子どもが結びつかず、子どもが父親をこうあるべきではないモデルとして捉えることによって、子どもの社会的行動が促進されると述べている。このように、父親と子どもの結びつきの弱さには子どもの発達に良い影響をもたらす側面があり、よって父親と子どもの結びつきの弱さが他者の情動の調整、他者の情動の評価と認識といった他者領域の情動知性の高さに影響を与えた可能性が考えられる。また、父母の結びつきが弱いということは夫婦関係が脆弱であることが考えられる。菅原・八木下・詫摩・小泉・瀬地山・菅原・北村（2002）は、夫婦関係が悪ければ家庭の雰囲気が家族成員にとって居心地の悪いものになると報告している。家庭内の居心地が悪くなると、子どもは居心地の良い場所を求め、家庭外で交流を盛んに行うようになると考えられる。そのような家庭外での他者との交流における共感経験や情動に対処する経験が、他者の情動の評価と認識といった他者領域の情動知性の高さに影響を与えたと考えられる。

次に、家族内における影響力や権力、リーダーシップなどを示す勢力に関して、父親の勢力の強さ

は父親の尊厳や権威の高さを表していると考えられる。田村（1983）は、家庭内における父親の権威の弱さは子どもの社会適応などの問題を引き起こすと報告している。また、思春期から青年期にかけて、父親を自分の前に立ちはだかる完成されたイメージとして子どもが認知し、父親を乗り越えようとすることは特に男児の発達において重要だとされている（柏木，1993）。このように、子どもの発達には父親の勢力の強さが重要であり、情動知性の発達においても同様に父親の勢力の強さが重要であると考えられる。

自分から母への勢力の強さが自己の情動の調整、自己の情動の評価と認識といった自己領域の情動知性の高さに影響を与えることについて、母親に対して子どもの勢力が強いということは、母親が子どもの意見を聞き入れることの多さを表していると考えられる。親が子どもの意見を聞き入れるといった受容的な行動を子どもに対して行う家庭は、家族間のコミュニケーションが多く、友好的で他者に積極的な関心を示すことが多いとされる（柏木・松田・宮本・久世・三輪，1978）。他者に積極的な関心を示すということは、他者との関わりも多くなることが考えられ、その中で情動に対処する機会や共感経験が多くなり、それが自己の情動の調整、自己の情動の評価と認識といった自己領域の情動知性の高さにつながると考えられる。

「利害的関係」と情動知性の関連

家族の利害的関係と情動知性の関連について、自分から父への利害的関係が弱い場合は他者の情動の評価と認識といった他者領域の情動知性が高まることが明らかとなった。利害的関係が弱いということは、重要な事柄の有無に関わらず普段から相手との関わりを十分に持っている場合と、たとえ重要な事柄が関係しているとしても相手との関わりを持たない場合の 2 つの可能性が考えられる。つまり、結びつきの結果と同様に、自分から父親への関わり方は情動知性に影響を与えることが示唆された。父親への利害的関係の弱さと情動知性の関連について、父親と普段から十分に関わる関係性は父親と自分の結びつきが強いということが考えられる。父親と子どもが結びつき相互に信頼している関係は、子どもの学校適応度を高めるという報告があり（酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村，2002）、適応度が高ければ学校での他者との関わりが多くなることが考えられる。このような父親への利害的関係の弱さによる父子の信頼関係が学校における子どもの対人交流の多さにつながり、他者の情動の評価と認識といった他者領域の情動知性が高まることが考えられる。また、利害的関係の弱さのもう一方の意味合いである、どんな場合でも父親と関わらないということは父親と自分の結びつきが弱いということが考えられる。板倉・長谷川（2012）は、父子の結びつきと父母の結びつきに正の相関関係を報告しており、父子の結びつきが弱ければ父母の結びつきも弱いということが考えられる。父親と家族成員の結びつきの弱さが情動知性を高めることは本研究で明らかとなったことであり、その結果が父親への利害的関係と情動知性との関連においても得られたと考えられる。

また、母親から他の家族成員への利害的関係が弱い場合は自己の情動の評価と認識といった自己領域の情動知性を高めることが明らかとなった。つまり、母親の家族成員への関わり方が子どもの自己の情動の評価と認識といった自己領域の情動知性の高さに影響を与えることが示唆された。母親がどんなときも家族に充分に関わり合う関係性は母親と自分の結びつきが強いということが考えられ、子どもは母親に対して基本的信頼感を抱き、母親以外の他者に対しても信頼感を抱きやすくなると考えられる（豊田，2013）。他者に対して信頼感を抱くことで、どんな自分でも他者に受け止めてもらえると感じやすくなると考えられ、どのような自分の気持ちも素直に理解できるようになると考えられる。一方、母親と他の家族成員のどんな状況でも関わりを持たない家族関係では母親と自分の結びつきが弱いことが推察され、母親に対して基本的信頼感を抱くことができず、他者に対しても信頼感を抱きにくくなることが考えられる。他者への信頼感が乏しいと、他者との関わりが少なくなり、他者との対話や問いかけなどの自分の気持ちへの気づきの機会が少なくなることが考えられる。そのような環境では、自分の気持ちには自分自身の力のみで気づき理解しなければならないと考えられ、自己の情動の評価と認識といった自己領域の情動知性の高まりが示されたと考えられる。

「開放性」と情動知性の関連

家族の開放性と情動知性の関連について、父親の開放性の高さは自己の情動の調整といった自己領域の情動知性を高めることが明らかとなった。つまり、家族成員の開放性の高さは子どもの情動知性の高さに影響を与えることが示された。開放性が高いということは、家族外の人と積極的に関わりコミュニ

ケーションするということである。多くの他者との関わりの中で多くの共感経験をし、それによって情動知性が高まるという仮説は支持された。

情動知性の性差

情動知性の性差について、本研究では自己の情動の調整といった自己領域の情動知性において性差が認められ、女性よりも男性の方が自分の気持ちを調整する能力が高いことが明らかとなった。また、母と自分の結びつき、自分から父への利害的関係の上中下位群において他者の情動の調整といった他者領域の情動知性に性差が認められ、女性よりも男性の方が他者の気持ちを調整する能力が高いことが明らかとなった。その一方で、自分から父への利害的関係中位群において他者の情動の評価と認識といった他者領域の情動知性に性差が認められ、男性よりも女性の方が他者の気持ちを評価し認識する能力が高いことが示された。これらの結果は野崎（2012）の、自分の気持ちを調整する能力は女性より男性の方が高く、他者の気持ちを評価し認識する能力は男性より女性の方が高いという結果と一部一致する。Goleman（1995 土屋訳 1996）は、対人関係において男性は孤高かつ非情な自主自立を誇りとし、女性は親密に結ばれた集団の一員であることを重視するため、男性と女性では感情を処理する能力に差が生じると述べている。このことから、本研究では男性は女性より自己の情動の調整といった自己領域の情動知性が高く、女性は男性より他者の情動の評価と認識といった他者領域の情動知性が高いことが示されたと考えられる。しかし一方で、女性より男性の方が他者の情動の調整といった他者領域の情動知性が高いという結果も得られ、男性の方が女性より自己と他者の情動の調整といった自己領域と他者領域の情動知性が共に高いということが明らかとなった。これは平井・橋本（2011）の研究で明らかにされているように、男性が女性よりも情動知性が高いということを示唆する結果であると考えられる。

今後の課題

本研究では、過去の家族構造として思春期の家族構造を取り上げた。柏木他（1978）は、思春期はそれ以前の子どもの頃にできあがっている家族への依存状態から独立へ向かう時期であると述べている。よって今後は、思春期よりも強く家族へ依存している幼少期に焦点を当て、幼少期の家族構造と情動知性の関連を明らかにする必要があると思われる。

謝　　辞

本論文作成にあたり、多くの方にご指導とご協力をいただきましたことを、ここに謹んでお礼申し上げます。

またご多忙の中、多大な時間とご尽力をいただき、丁寧にご指導、ご助言を下さいました追手門学院大学心理学部准教授馬場天信先生に深く感謝の意を申し上げます。そして、貴重な時間を割いて質問紙の配布および調査にご協力いただいた追手門学院大学の先生方と学生の皆様に厚くお礼申し上げます。

引 用 文 献

Goleman,D.（1995）. Emotional intelligence. Bantam Books.（ゴールマン，D. 土屋京子（訳）（1996）. EQ：こころの知能指数　講談社）.

平井由佳・橋本由里（2011）. 看護学科における男女学生の情動知能特性の検討　島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, **5**, 19-26.

井村文音・石田弓（2012）. 家族成員間の相互作用の性質と青年の自己表現能力との関連 ―家族の偽相互性との観点から―　広島大学心理学研究, **12**, 217-234.

板倉憲政・長谷川啓三（2012）. 青年期の親子関係と父母関係の関連性に関する基礎研究　対人社会心理学研究, **12**, 85-91.

柏木惠子（編著）糸魚川直祐・原ひろ子・松田惺（著）（1993）. 父親の発達心理学 ―父性の現在とその周辺―　川島書店.

柏木惠子・松田惺・宮本美沙子・久世敏雄・三輪弘道（1978）. 親子関係の心理　有斐閣.

小松佐穂子・箱田裕司（2011）. 情動性知能に関する研究の動向　九州大学心理学研究, **12**, 25-32.

Minuchin, S.（1974）. Family and family therapy. Harvard University Press.（ミニューチン，S. 山根常男（監訳）（1984）. 家族と家族療法　誠信書房）.

日本心理学会（監修）箱田裕司・遠藤利彦（編）（2015）. 本当のかしこさとは何か ―感情知性（EI）を育む心理学―　誠信書房.

野口修司・狐塚貴博・宇佐美貴章・若島孔文（2009）. 家族構造測定尺度―ICHIGEKI―の作成と妥当性の検討　東北大学大学院教育学研究科研究年報, **58**, 247-266.

野崎優樹（2012）. 自己領域と他者領域の区分に基づいたレジリエンス及びストレス経験からの成

長と情動知能の関連　パーソナリティ研究, **20**, 179-192.

大野木裕明（2004）．情動知能指数（EQS）と自我態度スケール（EAS）および短縮版ネオ人格目録改訂版（NEO-FFI）間の相関的関連性　福井大学教育地域科学部紀要, **60**, 1-8.

大野木裕明（2005）．EQS（情動知能指数）とFFPQ（5因子性格検査）間の相関的研究　福井大学教育地域科学部紀要, **61**, 17-26.

酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則（2002）．中学生の親および親友との信頼関係と学校適応　教育心理学研究, **50**, 12-2.

Salovey, P. & Mayer, J.D.（1990）．Emotional Intelligence. *Imagination*, *Cognition and Personality*, **9**, 185-211.

Sifneos, P. E.（1973）．The prevalence of 'alexithymic' characteristics in psychosomatic patients. *Psychotherapy and Psychosomatics*, **22**, 255-262.

菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則（2002）．夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連　教育心理学研究, **50**, 129-140.

田村喜代（1983）．家庭教育と父親 ―その性役割を追って―　家政学雑誌, **34**, 435-439.

豊田弘司（2008）．女子大生における情動知能に及ぼす共感経験の効果　教育実践総合センター研究紀要, **17**, 23-27.

豊田弘司・森田泰介・金敷大之・清水益治（2005）．日本版ESCQ（Emotional Skills & Competence Questionnaire）の開発　奈良教育大学紀要, **54**, 43-47.

豊田弘司・桜井裕子（2007）．中学生用情動知能尺度の開発　教育実践総合センター研究紀要, **16**, 13-17.

豊田弘司・照田恵理（2013）．大学生におけるストレッサー、ストレス反応及び情動知能の関係　奈良教育大学紀要, **62**, 41-48.

若原まどか（2003）．青年が認識する親への愛情や尊敬と，同一視および充実感との関連　発達心理学研究, **14**, 39-50.

Wong, C. S., & Law, K. S.（2002）．The effects of leader and follower emotional intelligence on performance and attitude : An exploratory study. *The Leadership Quarterly*, **13**, 243-274.

八木秀夫（2010）．家族における相互作用と個人システムの境界の形成 ――接触と分離のバランス――　仁徳大学研究紀要人間学部篇, 25-33.